

◆2021年8月第2週の説教

■日時：2021年8月8日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか。」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙 10：14－17（p288）

■讃美歌：351「聖なる聖なる」・56「主よ、いのちのパンをさき」

お早うございます。

東京の感染者が先週の木曜日に5,000人を超えました。その結果、医療が崩壊の兆しを見せ始めています。医療的ケアが必要な人に必要な対応が出来ず、自宅で待機させられた結果重症化してしまう。そして、重症化ないしそれに近い状態にならなければ入院出来ないと言う信じられない現実が始まっています。

又、ワクチンの2回の接種を終えた者も、重症化を免れるだけで感染しないわけではないことをしっかり心に覚えながら生活して行かなければならないと思います。

いずれにしても、先に専門家たちによって予告された通りの感染の広がりです。

ワクチンの接種を受けてもなお安心出来ない現実を前に、コロナが収束する時はいつになるのかと思わずにはいられません。しかし、必ずその時が訪れることを信じて、祈りつつ日々の生活を送りたいと思います。

それでは、今日与えられた御言葉を見てまいりましょう。

10章14節です。

14：ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。

伝道の原点を問う御言葉です。

自分は、どこで御言葉に出会ったかです。

両親共にクリスチャンである家庭に生まれた私は、物心ついた時にはすでに御言葉との出会いは始まっていました。

家では家庭礼拝が行われ、教会では教会学校に通っていたからです。

キリスト教に対して何も疑問を持つこともなく、小学校6年生の時に参加したキリスト教の大きな伝道集会で洗礼を受けることを決心しました。でも、周りの人から「まだ早い」と言われ、それから2年後の中学2年生のクリスマスまで待ち、信仰告白をして洗礼を受けました。14歳の時でしたので、来年のクリスマスで信仰生活60年となります。

皆様の場合はどのようにして御言葉と出会ったのでしょうか。

私と同じように、両親からでしょうか。

あるいは、私の母の場合のように兄弟姉妹に連れられて教会を訪れたからでしょうか。

又、友人に誘われて、集会案内のチラシを見て、キリスト教主義の学校で学んでいたなど、いろいろあると思います。

ただ、確かなことは、私たちが御言葉と出会う時、そこには、必ず御言葉に触れさせる機会を与えた人の存在があることです。チラシにしてもそうです。ポストにチラシを入れた人がいたからこそ教会を知ったのであり、立川教会のHPを見て訪れた人も、HPを作成した人がいたからこそ教会に来ることが出来ました。

このように、主イエス・キリストの福音が宣べ伝えられる所には、必ず宣べ伝える人がいるのです。

続いて15節です。

15：遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。

福音を宣べ伝える者がいてこそ、御言葉との出会いが生まれます。

宣べ伝える者がいなければ、誰も御言葉と出会えず、教会を訪れる人はなく、教会の歴史は幕を閉じます。

だからこそ、「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」なのです。

ギリシャ語の「足」の本来の意味は、戦いの勝利を人々に知らせる伝令を意味しました。

勝利を告げる伝令の言葉が、どれほど喜びを人々に与えたかは想像するに難しくありません。

戦いに敗れる時、それは、祖国の滅亡と、人々は殺されるか、奴隷として連れて行かれるかの過酷な運命が待ち構えていました。それに対し、勝利の知らせは、死から生へ移されるほどの意味を持ち得ていました。

福音も同じです。

主イエス・キリストの福音は、暗闇の中、襲い来る人生の不安と絶望の中で、確かな明りとして私たちの生きて進むべき道を照らし、私たちを導きます。人生を振り返った時、私たちは、イエス様に導かれて長い人生の道のりを歩んで来た経験をしています。その時々、自分を導く御言葉は与えられました。そして、どの御言葉であっても、悲しみは慰められ、心の渇きは潤され、明日に向かう希望と力が与えられたのです。

私が6歳の時、交通事故で一つ下の幼い妹を失い、悲しみに打ちひしがれていた母を支えたのは、イエス様がエルサレム入城の時に弟子に告げた「主がお入り用なのです」（ルカ 19:31 p147）との御言葉でした。

1919年に創設され、私が関係する基督教共助会は、「小さな群れよ、恐れるな。あなた方の父は喜んで神の国をくださる」（ルカ 12:32 p132）との御言葉に励まされ、導かれて、戦前、戦時、戦後の100年の歴史を歩んで来ました。

受洗した14歳から60年に及ぼうとする私の信仰生活を導いている御言葉は、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ 15:13 p199）です。自分の現実の姿とは最もかけ離れたこの御言葉は、なぜか私を引き付けて止まないのです。

聖書の御言葉を通して、不思議なことがあります。

旧約聖書の詩編は、例えば86編（p923）のように、私を慰め、安らわせる一方、51編（p884）は、私を鞭打ちます。もし、このダビデの告白が、そのまま終わっているなら、私は救いを見出すことが難しいように思います。

しかし、私たちには、イエス様が与えられています。イエス様の十字架、その苦しみによって、私の耐え難き罪は耐えて赦されるのを覚えるのです。

私を安らわせる詩編 86 編、鞭打つ 51 編を続けて読み、その後に、私に慰めを与える讚美歌第 2 編 231 番をご紹介します。

まず、詩編 86 編です。

5：主よ、あなたは恵み深く、お赦しになる方。

あなたを呼ぶ者に

豊かな慈しみをお与えになります。

6：主よ、わたしの祈りをお聞きください。

嘆き祈るわたしの声に耳を向けてください。

7：苦難の襲うときわたしが呼び求めれば

あなたは必ず答えてくださるでしょう。

8：主よ、あなたのような神は神々のうちになく

あなたの御業に並ぶものはありません。

9：主よ、あなたがお造りになった国々はすべて、

御前に進み出て伏し拝み、御名を尊びます。

10：あなたは偉大な神

驚くべき御業を成し遂げられる方

ただあなたひとり、神。

次に詩編 51 編です。

3：神よ、わたしを憐れんでください

御慈しみをもって。

深い御憐れみをもって

背きの罪をぬぐってください。

4：わたしの咎をことごとく洗い

罪から清めてください。

5：あなたに背いたことをわたしは知っています。

わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。

6：あなたに、あなたのみにもわたしは罪を犯し

御目に悪事と見られることをしました。

あなたの言われることは正しく

あなたの裁きに誤りはありません。

7：わたしは咎のうちに産み落とされ

母がわたしを身ごもったときも

わたしは罪の内にあつたのです。

8：あなたは秘義ではなくまことを望み

秘術を排して知恵を悟らせてくださいます。

9：ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください

わたしが清くなるように。

わたしを洗ってください

雪よりも白くなるように。

10：喜び祝う声を聞かせてください

あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。

11：わたしの罪に御顔を向けず

咎をことごとくぬぐってください。

最後に讃美歌第2編231番です。歌詞を読みます。

罪、咎（とが）、不義、悪、闇、恥、汚れ、

主よ、主よ、枷をば、毀（こぼ）ちて、解き放ち給え

主の苦しみはわがためなり、

我は死ぬべき罪人なり

かかる我が身に代わりましし、

主の御言葉はいと畏（かしこ）し

血潮したたる主の御頭（みかしら）

とげにさされし主の御頭（みかしら）

悩みと恥とにやつれし主を

我は畏（かしこ）み君と仰ぐ

罪、咎（とが）、不義、悪、闇、恥、汚れ、

主よ、主よ、枷をば、毀（こぼ）ちて、解き放ち給え

御言葉の 16 節に戻ります。

16：しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。

旧約の時代、イスラエルの民は背きの罪を悔い改めることなく、北イスラエルは BC722 年、南王国ユダは BC587 年に滅ぼされました。それから 2,500 年を経た 1948 年にパレスチナの地に再びイスラエルが建国されるまで、ユダヤ民族は国を持たぬ流浪の民、散らされた民としての歴史を歩みます。

福音を聞いた者全てに救いが訪れるわけではありません。

福音を聞きつつも、喜びの知らせとして聞くことの出来ない者もいます。

イエス様の語られた種蒔きの譬えのようにです。

にもかかわらず、私たちは、福音を携えて人々の中に分け入ることが求められています。

なぜなら、17 節の御言葉の通りだからです。

17：実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

イエス様が神様から遣わされ、私たちの罪を背負って十字架に架けられたこと、イエス様の十字架の死によって私たちの罪が赦され、3 日目に死を打ち破って甦られたことを信じる全ての者に救いの道は開かれました。

ユダヤ教の中から生まれたキリスト教は、使徒パウロの働きにより、今や世界の隅々にまで宣べ伝えられるに至りました。

神の国は言葉でなく力であるとの御言葉にあるように、福音は、生きる力です。

この福音に生き、生かされている者として、御言葉を一人でも多くの人々に告げ知らせて行く者になりたいと思います。

祈りましょう。